

2023年11月26日 説教「毎日聖書を調べる」

使徒の働き 17章 10～15節

ピリピからマケドニヤに首都であるテサロニケに移動したパウロの一行は、ユダヤ人会堂に入り、聖書に基づいてユダヤ人達と論じ合いました。イエス・キリストの十字架と復活を伝え、旧約聖書から論証したのです。ユダヤ人達はもとより、ギリシャ人の中にも信じる者が出ました。ところが、妬みにかられたユダヤ人たちがヤソンの家を襲ってパウロたちを捜索しました。しかし、見つけれずにヤソンたちを拘束しましたが、保証金で釈放せざるをえませんでした。

### 1. 素直なユダヤ人たち (10～11節)

①ベレヤへ (10)「兄弟たちは、すぐさま、夜のうちにパウロとシラスをベレヤへ送り出した。ふたりそこに着くと、ユダヤ人の会堂に入って行った。」

そんなわけで、危険を回避するため、キリストにある兄弟たちは、人の目に触れない夜のうちに、パウロとシラスをベレヤへと送り出したのです。ベレヤはマケドニヤの国内にあって、テサロニケから南西 80 キロほどのところにありました。パウロとシラスはベレヤに着くと、すぐにユダヤ人会堂に入り、早速伝道を始めました。

②熱心に聞き (11)「このユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。」

ベレヤのユダヤ人たちの特徴がここに記されています。彼らは、テサロニケにいるユダヤ人たちより「良い人たち」であったとあります。「良い人」というのは素直というほどの意味です。そして、彼らはパウロたちの語るみことばを非常に熱心に聞いたというのです。さらに、そこで語られたことについて、果たしてその通りであるかどうかを、日々に聖書を開いて調べたというのです。

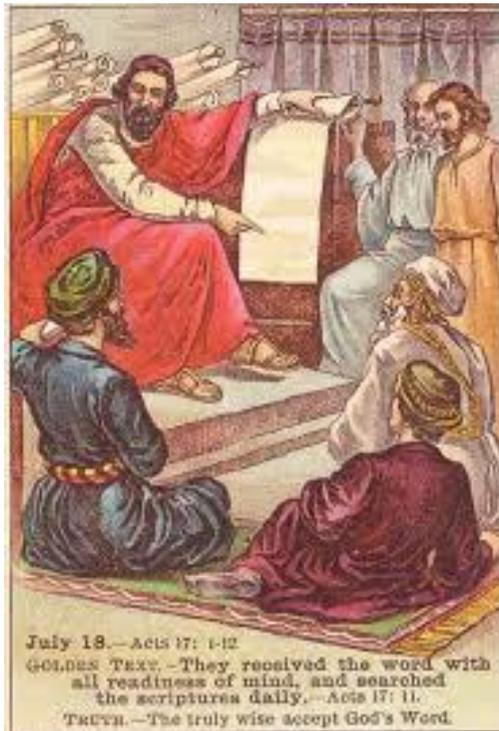
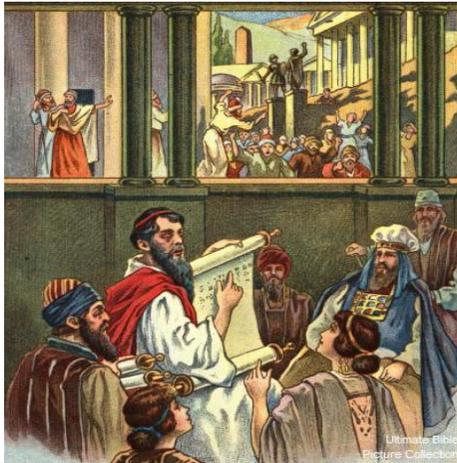
### 2. ベレヤでの出来事 (12～13節)

①信じる人々 (12)「そのため、彼らのうちの多くの者が信仰に入った。その中にはギリシャの貴婦人や男子も少なくなかった。」

そんなこともあって、彼らのうちの多くの者たちが、キリストを信じるに至ったのです。「その中にはギリシャの貴婦人や男子も少なくなかった」とありますが、マケドニヤはギリシャの近くにありましたから、多くのギリシャ人たちが移り住んでいたのです。知的なことに興味を持つ者たちが聖書を学び、その中にある真理に目覚めたということです。

②群衆を扇動 (13)「ところが、テサロニケのユダヤ人たちは、パウロがベレヤでも神のことば伝えていることを知り、ここにもやって来て、群衆を扇動して騒ぎを起こした。」

ところが、テサロニケのユダヤ人たちの妬みと敵愾心は強く、ベレヤ



までも追い回し、パウロたちの働きを邪魔しようとしたのです。キリストの福音が広まることを阻止しようとしたのです。そのために、このベレヤの地においても、人々にパウロたちへの悪口や誹謗をし、周りに騒ぎを起こしていったのです。これはパウロ達に対する嫌がらせであり、迫害でもありました。場合によっては、危害をも加える可能性もありました。

### 3. ベレヤからアテネへ (14~15 節)

#### ①パウロを送り出し (14) 「そこで兄弟たちは、ただちにパウロを送り出して、海辺まで行かせたが、シラスとテモテはベレヤに踏みとどまった。」

パウロの周辺の兄弟たちは、このままにしていれば、不測の事態も起きる事も考えて、避難させることにしました。向かわせた所については、ただ海辺とだけあって、具体的にどこであるとは書いてありません。また、そこに向かったのはパウロであって、シラスとテモテはそのままベレヤにとどまって伝道が続けたのです。実を言うと、ここに至ってテモテが伝道旅行に加わっているということがわかるのです。彼がアジアのデルベの出身で、熱心な祖母、母の信仰を受け継いでいました(16:1)。パウロはテモテを育てることに心を向け、テモテへの手紙第一、第二を記していますが、そこにその熱意が表れています。

#### ②アテネに行ったパウロ (15) 「パウロを案内した人たちは、彼をアテネまで連れて行った。そして、シラスとテモテに一刻も早く来るように、という命令を受けて、帰って行った。」

さて、パウロを守り、案内した人達は、彼をアテネまで連れていきました。これが海路であるか、陸路であるかはわかりません。機密にしないと、危険が及ぶと思われ、情報が伝えなかったのかもしれませんが。パウロはアテネにおける歩みが始まりましたが、シラスとテモテには早く来てもらって宣教を共にする必要を強く思いました。そこで、案内してくれた人々にシラスとテモテができるだけ早くアテネに来るようにとの伝言をして、送り出したのです。

《結論》今朝は11節「このユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのおりかどうかと毎日聖書を調べた。」に注目していきます。

まずは、この地のユダヤ人たちについて「良い人」とあるのは「素直である」と言った意味であることは既にお伝えしました。人が御言葉の前に立つ時に、この謙虚さがとても大切です。御言葉に対する素直さが、キリストの福音に出会うきっかけとなったことを覚えておきましょう。

それでは、ベレヤのユダヤ人たちはただ盲目的に言われるままを受け入れたのでしょうか。いいえ、そうではありませんでした。彼らは、パウロたちによって語られたことが、本当に聖書に基づいているのだろうかと思われ、熱心に聖書を調べたのです。言うまでもなく、当時、聖書といえは今日

の旧約聖書です。ところで、「使徒の働き」の17章には、テサロニケにおいて、彼らは「論じた」とか、「論証した」とあるように、パウロたちは論理を大切に伝えたのです。おそらく、このベレヤにおいてもそのようにして、そのユダヤ人たちに語ったと思われます。そこで、それを熱心に聞いたベレヤのユダヤ人たちも、それを確かめるために「調べた」のです。このようにみていくと、パウロたちもユダヤ人たちも、何か頭でっかちで理屈っぽいと思われるかもしれませんが、しかし、当時のユダヤ人にとって、イエスがキリストであると言われても、それを確かめるには、聖書を綿密に調べることが重要な方法だったのです。イエスという人物が旧約聖書にあるメシヤ(救い主)と合致しているかを考究することは重要であったのです。

ウェストミンスター信仰告白1章の九に「聖書解釈の無謬の規範は、聖書自体である。従って、いかなる聖句であれ、その真の完全な意味について疑問があるときには、それは、もっと明瞭に語っている他の幾つかの箇所によって調べられ、知られなければならない」とありますが、聖書は念入りに調べられることによって真理が明らかされていくのです。また、その聖書箇所について知るために、謙虚に学び合い、論じ合うことは有益なのです。

とはいえ、論ずるといって学問上のことであって、一般信徒には関係ないものと思われる向きがありますが、それは誤解です。ウェストミンスター信仰告白1章の七には「聖書の中のあらゆる事柄が、それ自体で同じくらい分かりやすいとか、あらゆる人々にとって同じくらい明瞭だということはない。しかし、救いのために知られ、信じられ、守られる必要がある事柄は、聖書のどこかの箇所には非常に明瞭に述べられ、説明されているので、学識ある人ばかりでなく、そうでない人も、通常の手段を適切に用いることによって、それらについて十分な理解に到達することができる。」とあります。これは実際のことで、聖書を理解する時には、教育を受けているとか、受けていないとかは、必ずしも関係がありません。むしろ、信仰をもって聖書を読んでいくときに、正しい理解が得られることがよくあるのです。

私たちも日々聖書を調べていくことは有益なことです。多忙な毎日ではありますが、聖書を読み霊想することを勧めます。また、御言葉について考えることも助けになります。考えるための方法として、新改訳聖書には欄外注がついています。わかりにくい部分などを、欄外注の参照聖句を開いていくと良い学びになります。また、その意味を考え合うために、主にある友と語り合うこと、論じ合うことも良い機会です。他のクリスチャンの意見が、考えを深めるのに役立つ、考えるヒントになる場合があります。また、さらに深めていきたい時には、参考書を用いていくことも良いことです。教会にも、そのための本がありますから、遠慮なく用いて調べていきましょう。また、説教でわからなかったことについて、質問することも考えるのに役立つかもしれません。咀嚼してこそ食べ物には味わえ、栄養がついていくように、御言葉を噛みしめ、魂の奥底で受け止めていきましょう。そして、キリストと出会い、深く知り、その恵みにあずかっていくことではありませんか。

アメイジンググレイスの作者ジョン・ニュートンは、散々悪さを重ねてきたことを、本当に知らされたのは、船が転覆しそうになった時に、神に祈った時でした。彼はその時に、本当に悔い改めたのです。そして、真の愛によって救しをいただくことができたのです。まさに「驚くべき愛」でした。彼は信ずると共に献身をしました。そして、伝道者の道へと進んでいったのです。